

[A年]復活節第4主日(2021年4月25日)**【旧約聖書日課】ネヘミヤ記2章1～18節**

¹アルタクセルクセス王の第二十年、ニサンの月のことであった。王はぶどう酒を前にし、わたしはぶどう酒を取って、王に差し上げていた。わたしは王の前で暗い表情をすることはなかったが、²王はわたしに尋ねた。「暗い表情をしているが、どうかしたのか。病気ではあるまい。何か心に悩みがあるにちがいない。」わたしは非常に恐縮して、³王に答えた。「王がとこしえに生き長らえられますように。わたしがどうして暗い表情をせすにおれましょう。先祖の墓のある町が荒廃し、城門は火で焼かれたままなのです。」⁴すると王は、「何を望んでいるのか」と言った。わたしは天にいます神に祈って、⁵王に答えた。「もしも僕がお心に適い、王にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖の墓のある町にお遣わしてください。町を再建したいのでございます。」⁶王は傍らに座っている王妃と共に、「旅にはどれほどの時を要するのか。いつ帰れるのか」と尋ねた。わたしの派遣について王が好意的であったので、どれほどの期間が必要なかを説明し、⁷更に、わたしは王に言った。「もしもお心に適いますなら、わたしがユダに行き着くまで、わたしを通過させるようにと、ユーフラテス西方の長官たちにあてた書状をいただきとうございます。⁸また、神殿のある都の城門に梁を置くために、町を取り巻く城壁のためとわたしが入る家のために木材をわたしに与えるように、と王の森林管理者アサフにあてた書状もいただきとうございます。」神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた。

⁹こうして、わたしはユーフラテス西方の長官のもとに到着する度に、王の書状を差し出すことができた。王はまた將校と騎兵をわたしと共に派遣してくれた。¹⁰ホロニムサンバラトとアンモン人の僕トビヤは、イスラエルの人々のためにすることをしようとする人が遣わされて来たこと聞いて、非常に機嫌を損ねた。

¹¹わたしはエルサレムに着き、三日間過ごしてから、¹²夜、わずか数名の者と共に起きて出かけた。だが、エルサレムで何をすべきかについて、神がわたしの心に示されたことは、だれにも知らせなかった。わたしの乗ったもののほか、一頭の動物も引いて行かなかった。¹³夜中に谷の門を出て、泉の前から糞の門へと巡って、エルサレムの城壁を調べた。城壁は破壊され、城門は焼け落ちていた。¹⁴更に泉の門から王の池へと行ったが、わたしの乗っている動物が通る所もないほどであった。¹⁵夜のうちに谷に沿って上りながら城壁を調べ、再び谷の門を通過して帰った。

¹⁶役人たちは、わたしがどこに行き、何をしたか知らなかった。それまでわたしは、ユダの人々にも、祭司にも、貴族にも、役人にも、工事に携わる他の人々にも、何も知らせしてはいなかった。¹⁷やがてわたしは彼らに言った。「御覧のとおり、わたしたちは不幸の中であえいでいる。エルサレム

は荒廃し、城門は焼け落ちたままだ。エルサレムの城壁を建て直すのではないか。そうすれば、もう恥ずかしいことはない。」¹⁸神の御手が恵み深くわたしを守り、王がわたしに言ってくれた言葉を彼らに告げると、彼らは「早速、建築に取りかかる」と応じ、この良い企てに奮い立った。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一12章3～13節

³ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

⁴賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。⁵務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。⁶働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのと同じ神です。⁷一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。⁸ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、⁹ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、¹⁰ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。¹¹これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分けて与えてくださるのです。

¹²体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。¹³つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書11章17～27節

¹⁷きて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。¹⁸ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。¹⁹マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに來ていた。²⁰マルタは、イエスが來られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に來られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

ネヘミヤ記2章1～18節

1アルタクセルクセス王の第二十年、ニサンのものである。王の前にはぶどう酒が出されていた。私はぶどう酒を取り、王に差し上げた。私は王の前で暗い表情をしたことはなかったが、²王は私に言った。「どうして暗い表情をしているのか。病気ではないのか。そうでなければ何か心に悩みがあるに違いない。」私はひどく恐れて、³王に言った。「王様はどこしえに生き長らえることができますように。どうして暗い表情をせずにおれましょう。先祖の墓のある都は荒廃し、その門は焼失してしまっているのです。」⁴王は私に言った。「あなたは何を求めているのか。」私は天の神に祈り、⁵王に言った。「もし王様が良しとされ、僕があなたの前に好意を得ますならば、私をユダに、先祖の墓のある町に遣わしてください。町を再建したいのです。」⁶王は私に言った。傍らには王妃が座っていた。「旅はどのくらいかかるのか。いつ帰るのか。」王の御前に好意を得、王は私を遣わすことにしたので、私は王に日程を伝えた。⁷さらに、私は王に言った。「もし王様が良しとされますならば、私がユダに着くまで、私を通過させるようにと、エベル・ナハル地方〔別訳→ユーフラテス西方〕の長官たちに宛てた書状をくださいますようお願いいたします。⁸また、神殿の城塞の門に梁を置いたため、町の城壁のため、私が入る家のため、木材を私に与えるよう、王の森林を管理するアサフにあてた書状もくださいますようお願いいたします。」神の恵み深い手が私の上にあつたので、王は私に許可を与えた。

⁹こうして私はエベル・ナハル地方の長官たちのもとに行き、彼らに王の書状を差し出した。王は、私と共に將軍たちと騎兵を派遣してくれた。¹⁰ホロニムサンバラトとアンモン人の僕トビヤは、イスラエルの人々のために援助しようとする人間が来たということを知った。それは彼らにとって甚だ不都合なことであった。

¹¹エルサレムに着き、私はそこに三日間滞在した。¹²ある夜、私はごく少数の人々と共に起きて出かけた。ただ、わが神が私の心に示されたこと、すなわちエルサレムに対して何をなすべきかを、私は誰にも言わなかった。私が乗る家畜以外には、一頭の家畜も連れて行かなかった。¹³夜間に谷の門を出て、竜の泉の前へ、そして糞の門へと巡り、エルサレムの城壁を調べた。城壁は崩され、城門は焼失してしまっていた。¹⁴さらに泉の門、そして王の池へと通って行ったが、私の乗っている家畜が通る場所さえなかった。¹⁵夜のうちに谷に沿って上り、城壁を調べ、それから引き返し、谷の門を通過して戻って来た。

¹⁶役人たちは、私がどこに行き、何をしたのか知らなかった。ユダヤ人にも、祭司にも、貴族にも、役人にも、その他工事をする人々にも、私はまだ何も知らせていなかった。¹⁷そこで私は彼らに言った。「御覧のとおり、私たちは困難のただ中に

ある。エルサレムは荒れ果て、その門は火で焼かれたままだ。さあ、エルサレムの城壁を再建しよう。そうすればもう私たちが恥辱を受けることはない。」¹⁸私が彼らに、神の恵み深い手が私の上にあること、そしてまた王が私に語った言葉を告げると、彼らは、「立ち上がって、再建しよう」と言って、この良い企てに奮い立った。

コリントの信徒への手紙一12章3～13節

³そこで、あなたがたに言っておきます。神の霊によって語る人は、誰も「イエスは呪われよ」とは言わず、また、聖霊によらなければ、誰も「イエスは主である」と言うことはできません。

⁴恵みの賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。⁵務めにはいろいろありますが、仕えるのは同じ主です。⁶働きにはいろいろありますが、すべての人の中に働いてすべてをなさるのは同じ神です。⁷一人一人に霊の働きが現れるのは、全体の益となるためです。⁸ある人には、霊によって知恵の言葉、ある人には同じ霊に應じて知識の言葉が与えられ、⁹ある人には同じ霊によって信仰、ある人にはこの唯一の霊によって癒しの賜物、¹⁰ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。¹¹しかし、これらすべてのことは、同じ一つの霊の働きであって、霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

¹²体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様です。¹³なぜなら、私たちは皆、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの霊によって一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったからです。

ヨハネによる福音書11章17～27節

¹⁷さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。¹⁸ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。¹⁹大勢のユダヤ人が、兄弟ラザロのことでマルタとマリアを慰めようとして来ていた。²⁰マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えるに行ったが、マリアは家で座っていた。²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださると、私は今でも承知しています。」²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じています」と言った。²⁵イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・4月25日「復活節第4主日」の日課主題は「イエスは復活また命」。伝統的な教会暦では、復活節第4主日または第3主日に「牧者(羊飼)い)キリスト」が記念されてきたが、これに合わせて教会会議を開催する習慣が広まった。この習慣は、現在では一般的ではない。「牧者キリスト」は、「ヨハネ福音書」が典拠になるキリスト論であるが、復活節期間中の聖書日課は、どの年にも必ず「ヨハネ福音書」からの福音書日課箇所が設定されてきた。「ヨハネ福音書」の主イエスは、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)と異なり、全編を通じて「復活者キリスト」であることをすでに前提として描かれている。

旧約日課(ネヘミヤ2章より)

・「ネヘミヤ記」は、ユダヤ正典中では「諸書」に配置され、「エズラ記」と合わせて一巻の書として扱われてきた。ユダヤ教会で用いられる正典で両書が区分されるようになったのは15世紀以降、正典が写本から印刷本へと移行した時代である。一方、キリスト教会が初期に依拠したギリシア語旧約聖書(七十人訳)では両書を合わせた「エズラス書(β)」が収められており、キリスト教会でも初期には両書を一貫本として扱っていたと考えられるが、古代教父オリゲネス(185～254年頃)が区分を付けて以来、分けて扱われることが一般化していった。

・「エズラ・ネヘミヤ記」は、バビロン捕囚後、ペルシヤ王キュロスの政策によってユダヤ帰還を果たした人々が、神殿再建、共同体再興、城壁修復を経て、「律法」の民としての新しい歩みを始めていく時代を、指導者ら(ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤ)の物語として描く構成となっている。背景に描かれるペルシヤ王(ダレイオス＝前522～486年頃在位、クセルクセス＝前486～465年頃在位、アルタクセルクセスI世＝前465～424年頃在位、アルタクセルクセスII世＝前404～359年頃在位)の在位期を踏まえると、ここで扱われる内容は100年ほどの期間をかけて進行した出来事である(ただし、「エズラ・ネヘミヤ記」の記述構成では、王在位の時期に不整合が生じる)。この時代は、アケメネス朝ペルシア(前550～330年頃)の全盛期であるが、帝国内の共通語はもっぱらアラム語が用いられた。当初、キュロス王がバビロニア帝国を滅ぼした(前539年)後、ユダヤ人を含めた多くの捕囚の民を故郷地に帰還させたことについては、碑文が残されているがそれによると、バビロニア帝国の王が被支配民を首都バビロンに連行するに際して各国の神像祭壇をバビロンに集めさせたことによって、バビロンの守護神マルドゥークの怒りを引き、バビロニア帝国に代わるバビロニア守護者としてペルシアを興し、キュロスを招き入れたためだと説明されている。これは、キュロスによるバビロン支配(「バビロン王」を僭称)の正当

性を主張するためのものであるが、これに基づいて、バビロニアに集められていた諸国の神像神殿が元の地に返還される「帰還政策」が取られたのである。

・日課箇所は、ペルシア王アルタクセルクセスに献酌官として仕えていたユダヤ人ネヘミヤが、遅れていたエルサレムの城壁修復工事のために自願い出てアルタクセルクセス王の使者としてエルサレムに出向くことになった経緯と、エルサレム到着後最初の様子を物語る箇所である。時代はすでにユダヤ帰還開始から100年ほど経っていたことが想定されている。歴史上、アルタクセルクセス王はシリアからエジプトに至る地域の防衛拠点としてエルサレムの要塞化を計画していたことが知られており、城壁修復工事のためのネヘミヤ派遣は、この計画の一環として認められたことなのかもしれない。

・ネヘミヤの派遣に不満を持った人物として登場する「サンバト」は、この時代(前5世紀後半)にサマリア州の知事として記録の残る人名。この人物を中心としたサマリアの人々と、ネヘミヤのもとで城壁再建に着手したユダの人々との間に不和が生じている様子が、この後、断続的に描かれる。このサマリアの人々は、期間書記にゼルバベルの下で神殿再建に着手したユダ族およびベニヤミン族の人々に対して協力を申し出たという同祖を名乗る、おそらく北王国の十部族の末裔の人々(エズラ4:1～5)のことではないかと推認される。彼らは、ゼルバベルらによって協力申し出を拒絶されたため、再建計画を妨害するようになったとされている。これら一連の両者の反目の経緯は、新約時代に前提されているユダヤ人とサマリア人の対立の出発点になったと推察されているものである。帰還したユダ族・ベニヤミン族の人々がなぜサマリアの人々を拒絶したのか、旧約が正史として物語るイスラエル史を見ると分かりにくい、おそらく王国時代を経てユダ族・ベニヤミン族の南王国は、先に滅亡した北王国に伝えられていた諸伝承を取り込むことで、北王国と南王国を統合する「大イスラエル」という国家的アイデンティティを形成するようになったのだろう。しかし、歴史上、北王国と南王国との関係は、一時的な姻戚関係が結ばれた時代(北王国オムリ王朝時代)を除いて、常に対立関係にあったのであり、北王国存立中は、両国が同じアイデンティティを共有する理由はほとんどなかったはずである。そこで、ペルシア王の政策により進められた「ユダヤ帰還、エルサレム神殿再建」も、「大イスラエル」主義を標榜する唯一のイスラエル継承者としての自覚を持つユダ族・ベニヤミン族が、他の北王国部族と共同歩調を取ろうとすることはなかったのであろう。

・これらの推察は、「エズラ・ネヘミヤ記」と同時に編纂されたと考えられる「歴代誌」が、北王国の歴史をことごとく無視した南王国(ダビデ王家)至上主義のイスラエル史観で構成されていることも論拠となる。

使徒書日課(1コリント12章より)

・復活日から重ねて使徒パウロの書簡または説教(使徒言行録より)が取り上げられ、パウロの復活理解が強調されてきた。「ローマ書」6章(復活日使徒書日課)で明示的であるように、パウロは、主イエスの死と復活の出来事が、キリストに結ばれるものとして位置づけられた「洗礼」を介して弟子たち自身の「死と復活」というアイデンティティにされていることを、「コロサイ書」3章(復活節第3主日使徒書日課)でも、「1コリント書」12章(今回日課箇所)でも、同じように前提としている。

・日課箇所でそのことに触れるのは、「洗礼」が「聖霊授与」としても理解されていたことによる。「洗礼」と「聖霊授与」の関係は、「ローマ書」では不明瞭ながらも8章に至ると、「洗礼」の帰結として「聖霊」が授与されていることを、「神の子」論を踏まえて示している。日課箇所では、むしろ「聖霊授与」を個別特異的な「賜物授与」の根拠として挙げており、その「賜物」の多様性をなお一つに結びつける一致の根拠として「聖霊」そして「洗礼」の事実が示されている。

・3節「イエスは神から見捨てられよ(Ἀνάθεμα Ἰησοῦς ἀναθέμα・イエスス)」は、端的に「イエスは呪われよ」(聖書協会共同訳)と訳される言葉。パウロは、教会内で何者かがそのような言葉を口にしているかのような告げ口を受けて、「洗礼」を受け「聖霊」を授与された者の共同体の中に、そのようなことを口にできる者はないと窘めていられる。これは、おそらく「マラナ・タ(主よ、来てください) Μαράνα θά(16:22)を繰り返すときに「呪われよ ἀνάθεμα」(同節)の音に似た響きが生ずることから起こった非難である。

福音書日課(ヨハネ11章より)

・「マタイ福音書」の福音書日課進行を妨げて、二週続けて「ヨハネ福音書」から福音書日課が取られる。

・日課箇所は、「ラザロの復活伝承物語」の一部。いわゆる「死者蘇生奇跡」であるが、共観福音書で描かれる主イエスの死者蘇生奇跡と異なり、明らかに、主イエス自身の「復活」をあらかじめ指し示す出来事として描かれている。つまり、共観福音書では、主イエスの復活はあくまで神の御心により為される神のみ業であると理解されており、ゲッセマネの祈りでも、主イエス自身は、十字架の死に対しても拒否感を露わにしている。一方で、「ヨハネ福音書」では、主イエスは十字架を自身で担がれたことが強調されるなど、主イエスが自身の意志によって十字架の死に向かわれ、それと共に復活も主イエスご自身の意志に基づく御業であるかのように描かれていく。これは、ヨハネ福音書の描く主イエスは、公生涯の初めから天の父と一体の意志を持ち、また一体の言葉を語り、一体の御業を行う者として描かれることによる。

・24節のマルタの言う「復活」は、ユダヤ教と共通の「終末時のすべての者の復活」のこと。主イエスは、それとは異なる「わたしの復活」を信じさせることを示す。

来週の誕生日(4月25日～5月1日)**主日礼拝の讚美歌から**

- ・21-329番「目覚めよ、歌えよ」は、18世紀英国のジャーナリスト・スマートの作詞。18世紀英国の国教会司祭ホイスの原曲を音楽家サミュエル・ウェップ・Jrが讚美歌用に整えた曲と組み合わせられている。
- ・21-161番「見よ、主の家族が」(=☐39番)は、詩編133の「見よ、兄弟たちが共に座っている。なんといい恵み、なんといい喜び」を歌うもので、ユダヤ教会の典礼歌の形式に倣った讚美。
- ・21-448番「お招きに応えました」は、20世紀米国メソジスト教会牧師で20世紀後半の英語讚美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心的担い手となったグリーンが信仰告白式・堅信式のための讚美歌として作詞。曲は、教会旋法第6旋法による交唱聖歌(アンティフォナ)のための旋律で、17世紀の歌集から用いられてきたもの。202番と同曲。

21-329「目覚めよ、歌えよ」**Awake, arise, lift up your voice**

1. Awake, arise, lift up your voice, / let Easter music swell; / rejoice in Christ, again rejoice, / and on his praises dwell.
2. Oh, with what gladness and surprise / the saints their Saviour greet; / nor will they trust their ears and eyes / but by his hands and feet:
3. those hands of liberal love indeed / in infinite degree, / those feet still free to move and bleed / for millions and for me.
4. His enemies had sealed the stone / as Pilate gave them leave, / lest dead and friendless and alone / he should their skill deceive.
5. O Dead arise! O Friendless stand / by seraphim adored! / O Solitude again command / your host from heaven restored!

21-448「お招きに応えました」**Lord, We Have Come At Your Own Invitation**

1. Lord, we have come at your own invitation, / Chosen by you, to be counted your friends; / Yours is the strength that sustains dedication, / Ours a commitment we know never ends.
2. Here, at your table, confirm our intention, / Give it your seal of forgiveness and grace; / Teach us to serve, without pride or pretension, / Lord, in your Kingdom, whatever our place.
3. When, at your table, each time of returning, / Vows are renewed and our courage restored: / May we increasingly glory in learning / All that it means to accept you as Lord.
4. So, in the world, were each duty assigned us / Gives us the chance to create or destroy, / Help us to make those decision that bind us, / Lord, to yourself, in obedience and joy.